カケラ蒐集記

宴条　巽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カケラ蒐集記

【Ｎコード】
Ｎ６８７１Ｇ

【作者名】
宴条　巽

【あらすじ】
人間が、亡くしたモノ―カミサマ。彼らは今、ここにいる。

―０― 神話

遠い昔に知っていたモノ。
ここに。
そこに。
あそこに。
…どこに？

夢の国や、不思議な生き物のように、
忘れて知って、もう、会えない。
でも。
いつでも――ここにいる。
――そこに。
――あそこに。
――――――どこかに。

カケラ蒐集記

むかしむかし。
あるところに、かみさまがいました。

遠い遠い昔。
それは、まだ、進化していくなかで、人間が人間として、やっと落ち着いてきたあたりのことです。
地球が出来て、海と陸が出来て、生命がうまれて。

ときに絶滅して、ときに生き延びて。
いつのころからかサルと呼ばれる動物があらわれ、いつのころからか、その一部がヒトと呼ばれるようになる頃。

カミサマ、が、うまれました。
それは、本当は、ただの進化の一端だったのでしょう。
道具と知性を得たかわりに、爪と毛皮を失ったケモノの種が生きようと足掻いた証。
ヒトたちが新しい道具を編み出し、頭脳を発達させていたとき。
カミサマはうまれました。

その初め、カミサマは周りのヒトとは少し違う特徴を持っているヒトに過ぎませんでした。
あるモノは、水と触れ合うことが出来ました。
あるモノは、樹と。
あるモノは、風と。
生き物として生き残る術に、他のモノとの交流を選んだカミたちは、それぞれ選んだモノと触れ合うために、それまでのヒトとは少し違うものを持つようになりました。
動物が、自ら生き残るために爪や棘を手にいれたように、彼らは、ヒトから見た名でいう“異能”を手にいれたのです。
彼らは、自分とは全く別のものと、意思疎通をすることが出来たのです。
ヒトの群れのなかにうまれたカミサマたちは、ヒトたちに重宝がられていました。
彼らはヒトに、狩に良い場所を教え、畑になる土地を見つけ、空の変わり具合を伝えました。
ヒトが地球の歴史に生き残れた大きな理由はもちろん、自らの優れた知性なのでしょう。
しかし、カミサマたちの力があったからこそ、その繁栄は加速した

のです。
もちろん、その頃に、カミサマ、という呼び方はありませんでした。
彼らの関係は、蟻や蜂と同じ、“特長の違う同種の仲間”でした。
蟻や蜂に女王がいて、兵士がいて、子守がいるように、ヒトも互いに役割分担をしながら社会を形成していったのです。
そして、カミサマとヒトは調和を保ちながら、静かに世界中に生を得たのでした。

安寧の静寂、移り変わるがゆえに輪廻し、普遍であるもの。
キツネがウサギを食べ尽さず、ウサギもまた、草木を滅ぼさないように食べ、生き、産まれ、死に、また産まれる、生命の輪。
ヒトたちもまた、輪のなかで穏やかに生きていました。
生き物を滅ぼさないように狩をし、土を殺さないように畑を営んで。
ヒトは自然淘汰をかいくぐって生き残る必要の無い、大きな種になっていきました。
そして、ヒトの世界に平和が訪れたのでした。

…いつまでもそのままでいられれば、桃源郷が失われることはなかったのでしょう。
しかし、ヒトが持った知性は他の生き物のそれとはあまりにも違う変化を遂げてしまっていたのです。
どんな生き物にも知性はありながら、ヒトのソレだけ、特別に呼び分ける理由。
それは、“欲”と置き換えても良いもの。
「種の保存」ではなく、「個の保存」を願ったとき。

崩壊は、始まった。

熟しきった実に腐敗が訪れるように。
平和によって成長をする必要が無くなった知性は、しだいに傲慢を抱えるようになっていった。

「自分こそが、頂点に立つモノである」

そして、

ヒトは、カミを恐れるようになった。
欲を覚えたヒトは、自らこそが絶対の強者でなければ満足できなくなっていた。
自分には無い、そしてより強い力を、“異能”を持つカミは、異端のモノとなっていった。
水と流れ、洪水を呼ぶモノ。
風と彷徨い、竜巻を作るモノ。
火と広がり、火事を起こすモノ。
ヒトは、カミを、同族とは認めなかった。
カミ、という名を付け、異端視した。
捕え、囲い、殺し、捨てた。
その結果、
”生き残った”カミたちは、ヒトの元を離れた。
カミはカミと集まり、次第にひとつのムラができていった。
カミは、ヒトの前から姿を消した。
そして、ヒトはカミを忘れた。
己こそが最高の支配者であるという確証のために。

月日は流れ。
最強という驕りを纏ったヒトは、それでも平和を手にすることができました。
同種族の中にすら、支配する者と支配される者というシステムのを

確立することによって。
しかし、支配者たちは、下級の者たちが自分と同じように、頭を使って地位を覆すことができることを知っていたのです。
彼らは、昔捨てたカミと同様に、革命を恐れるようになっていきました。

しかし今度は、

王は、地位を不動のものとするために知恵を使い始めた。
やがて、王の、支配者としての証である神話がうまれ、国民は心に神を宿すようになる。
人は、神を畏れるようになった。

―1― 佐保姫

佐保姫の　糸染め隠る　青柳を　吹きな乱りそ　春の山風

山奥にひっそりとたたずむ、日本家屋にも似た古びた屋敷。
桜が咲き誇るそこには、穏やかな時が流れている。
縁側を、一筋の桜色が、吹き抜けた。
ぱたん、と襖が開いて、閉まった。

「姫様ぁ～」

春の日差し、としかいいようのない、透明で柔らかな光。
屋内なのに、なぜか座敷に光が踊っている。
その中心には、たおやかな女性が背を後ろの壁に預けて休んでいた。
朝もやのように柔らかな白い着物。
流れる髪の色も、また、淡い。
春眠、とでも言いたげに、そこだけ時が、ゆっくりと零れ落ちる。
穏やかな、悠久の瞬間。

その時。
壁の反対側の襖がさっ、と開いた。
と、また、ぱたんと閉じる。
閉まった襖の前には、少女が一人、たたずんでいた。
まだあどけなさを残すような面差し。
淡い暖色の着物を翻して、とたとたと、女性の駆け寄ってくる。
たどたどしい、というより、なんとなく走り方が変だ。
怪我でもしているような。
どこか痛々しい、軌跡。

「あら。どうしたの？」

襖の音で目を覚ましたのか、女性が少女に問いかける。

「……」

問いかけられて、少女は、ふらふらと立ち止まる。

瞳から、はらはらと桜の花びらがあふれた。

「あらあら。…おいで、桜」

女性が桜に向かって、手を差し伸べた。

桜。

その樹木を、人はいつから意識するようになったのか。

淡く、儚く、美しい。

桜が色付く頃、そうした形容が飛び交うのが当たり前となっている。

言葉は次第に肥大し、物語を産みだす。

桜にまつわるもの――美しい恋物語、幽玄な幻想、そして、狂気。

――桜ハネ、土ニ埋マッタ死体ノ緋ヲ吸イ上ゲタカラ、アンナ色ニ成ッタンダヨ――

――喰ラウ人ノ数ガ多ケレバ多イ程、緋ニ近付イテ美シク成ルンダヨ――

ダカラ、アンナニ、人ヲ、狂ワセル。

はらはらと、少女が桜色の涙を流しながら、うなだれる。

「そうねぇ。なんとでも言う者はいるわ。あなたが気に病む必要は無いのよ」

そういって、突っ伏した少女の頭に、女性の華奢なてのひらが重なる。

桜は傷つきやすい。
そんなことも、人間は忘れてしまっている。
ほんの少し、根を傷つけるだけで、全身を病んでしまうほどに。

「いい子ね。もう大丈夫よ」

そう言って、自分にすがりつく桜のカミに、佐保姫は優しくほころんだ。

佐保姫―春を司るカミたちの主。
春霞を纏い歩く姿は、華やかでありながら、どこか儚い。

季節を司る４人の姫たち。
彼女たち季節の姫は、世界を巡って季節を運ぶ。
彼女たちが留まれば季節も留まり、彼女たちが行けば、また、季節も巡る。
姫君たちは、それぞれの気に入りを持っており、それが故に世界でも季節の移りが変わってくる。
春の好むところには春が。
夏の好むところには夏が。
秋には秋、冬には冬といった具合に。
しかし、夏や冬と違って、気性の穏やかな春と秋は、気に入りの土地に赴くときであっても、それとなく留まり、そして、静かに次の姉妹が渡り来るのを待つ。
姫たちが一箇所に落ち着くと、臣下のカミたちがおもむろにその地に広がる。
ちょうど今、春のこの地は、桜のカミが移ろいている只中にあった。

「私…ニンゲンなんて…キライです…なんでそんな風に言われなきゃならないのですか…？」

しかし、人間は彼女たちのことを知らない。
知らないまま、彼女達を傷つける。
よく見ると、はらはらと涙を流す少女の髪は汚れ、傷み、輝きを失っている。
元は美しかったであろう着物は不自然なほどに煤け、解れ、破けていた。
花見客の出すゴミの山に。
道路の邪魔と桜木を伐採する機械に。
そして、人間の勝手な心にさえ。
たおやかな桜は傷つけられていた。

「もう、大丈夫よ。ほら、ね」

佐保姫が桜の傷んだ髪に手を伸ばす。
白く、しなやかな指が、傷んだ髪をゆっくりと梳いていく。
その細い流れに優しく手をかけながら、女性はふう、とため息をついた。
彼女が触れたところから、桜は元の姿を取り戻す。
病を、亡くしていく。
佐保姫に抱かれたカミは、すこしずつ癒えていった。

「…ね。大丈夫だから」

あなたがいなければ、私の統べる春は亡くなってしまう。
しかし、もう、ヒトはカミを忘れてしまった。
こちらがいくら覚えていても、ヒトにカミは見えず、聞こえない。

向き合えない。
存在を、認めてもらえない。
無いモノも同然、である。
無いモノは、相手に触れることはできない。
傷ついた彼女のために、自分が出来ることは、ほとんど、無い。

それならば。
その傷だけでも。
私が。

「佐保姫、様…」

安堵に眠る桜を優しく見下ろす春のカミの微笑みに、緋色が一筋、流れて消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6871g/

カケラ蒐集記

2010年12月11日00時44分発行